

片手のみの指揮による音楽表現の限界と可能性

浦 雄一

The Limits and the Potential of a 'One-handed' Conductor

Yuichi URA

要旨

本研究は、指揮者が片手のみを使用して指揮を行う際の問題点を明らかにし、その限界と可能性を探ることを目的とする。まず、1人の指揮者がタイプの異なる2つのグループ（吹奏楽団）を右手のみで指揮する実験を行った後、奏者に対し、片手による指揮の分かりやすさ（分かりにくさ）についてアンケートを実施した。次に、各グループの回答者を、実験後の反応によってそれぞれ3つの群に分類した上で、自由記述の回答について計量テキスト分析を行った。その結果、譜めくりに関する不都合や、表現や情報が伝わりにくいなどの問題点が浮き彫りになった。一方で、経験豊富な奏者が多い楽団においては、facial expression を活用した豊かな音楽表現に可能性を見出せることなどが示唆された。

1 はじめに

我が国の指揮教育において「不朽の名著¹」とも称される斎藤秀雄著『指揮法教程』は、専ら右手のテクニックを講じており、左手の用法については僅か4ページ²が割かれているのみである³。斎藤は、「左手の使用については一定の法則がなく、各人各様のゼスチュアである」ため、「右手の技術のように、Systemを立てて読者諸氏に明示することは出来ない」と述べている⁴。

一方、指揮という行為のパブリックイメージは、“両手を使って音楽を表現する”といったものようである。中学校音楽科の教科書にも「左手を効果的に使おう」「左手は右手と左右

¹ 高階正光『完本 指揮法入門』（東京：音楽之友社，2001），3。

² 全198ページ中。

³ 斎藤秀雄『指揮法教程』（東京：音楽之友社，1956），190-193。

⁴ 斎藤秀雄『指揮法教程』（東京：音楽之友社，1956），190。

対称に動かしてもよいのですが、右手から独立させて有効に使うよう心がけましょう」との記述がある⁵。

しかしながら、一上肢について、先天的または後天的な障害のほか、怪我や加齢を要因とした運動機能低下は当然に起こり得る。そして、これらを理由に指揮者として不適格であると画一的に判断することは、ダイバーシティ重視の観点から全く適当ではない。

片手のみの指揮による限界と可能性を探るため、本研究ではまず、指揮者が片手のみを用いて吹奏楽の合奏練習を行う実験を試み、続いて、奏者に対するアンケートを実施した。本稿では、それらの結果から、指揮者が片手で指揮した場合における奏者の反応について分析する。

2 実験および分析

2.1 指揮者について

本実験において片手で指揮を行ったのは、筆者自身である。指揮領域における博士号を取得しており、指揮者としてのキャリアは20年近くに及ぶ。また、現在の本務先において、「指揮法」の指導を10年以上継続している。2023年6月9日に発生した事故のため、左上腕骨骨折、全治3週間と診断された。

他の多くの指揮者と同じく、通常時は右手で拍を示すスタイルであるため、本実験においても右手のみを使用して指揮を行った。但し、通常時には左手を使用する“譜めくり”も右手で行う必要があるため、指揮棒は用いなかった。



写真1 通常の指揮

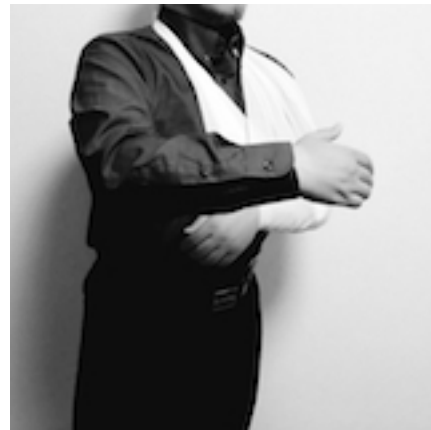


写真2 右手のみを使用した指揮

2.2 対象

本実験の対象は、大きく2グループに分けられる。

1つ目のグループは、筆者が楽長を務める宮崎市消防団音楽隊（以下、音楽隊）の隊員38人である。吹奏楽経験年数は、「5年以上10年未満」が3人、「10年以上」が35人であった。筆者の指揮による演奏の経験年数は、「1年未満」、「1年以上2年未満」、「3年以上4年未満」、「4年以上5年未満」が各1人、「5年以上10年未満」が7人、「10年以上」が27人

⁵ 小原光一 他 監修『中学生の音楽』2・3下（東京：教育芸術社，2023），67。

であった。音楽隊では、実験として、2回に亘る合奏練習⁶を行った。本実験における練習への参加回数は、平均 1.92 回であった。

2 つ目のグループは、筆者が定期的に指導を行っている宮崎大学教育学部附属中学校吹奏楽部（以下、吹奏楽部）の部員 26 人である。吹奏楽経験年数は、「1 年未満」が 3 人、「1 年以上 2 年未満」が 8 人、「2 年以上 3 年未満」が 9 人、「3 年以上 4 年未満」が 1 人、「4 年以上 5 年未満」が 3 人、「5 年以上 10 年未満」が 2 人であった。筆者の指揮による演奏の経験年数は、「1 年未満」が 6 人、「1 年以上 2 年未満」が 9 人、「2 年以上 3 年未満」が 11 人であった。吹奏楽部では、3 回に亘る合奏練習⁷を行った。本実験における練習への参加回数は、平均 2.65 回であった。

2.3 使用楽曲

音楽隊における実験では、以下の 5 作品を使用した。

- ・ 石田昌勝 作曲『ハロー・ファイアマン』（未出版）
- ・ 久石譲 作曲，佐藤博昭 編曲『さんぽ』（ミュージックエイト，2012）
- ・ 中田ヤスタカ 作曲，郷間幹男 編曲『新時代』（ウィンズスコア，2022）
- ・ 福田洋介 編曲『故郷の空 in Swing』（ウィンズスコア，2007）
- ・ Marco Marinangeli 作曲，郷間幹男 編曲『ジャンボリミッキー』（ウィンズスコア，2019）

一方、吹奏楽部における実験では、以下の 2 作品を使用した。

- ・ 水口透 作曲『マーチ：ペガサスの夢』（全日本吹奏楽連盟，2023）
- ・ 高橋宏樹 作曲『A New Singer：新たなる歌い手』（ブレーン，2023）

2.4 アンケート

いずれのグループにおいても、本実験における最後の練習の直後に配付および回収を行った。質問内容は、上記「2.2 対象」に必要となる項目のほか、「指揮者が片手で指揮を行う場合、両手で行う場合と比較して、『分かりやすさ』はどうでしたか」（5 段階評価⁸）、「そのように感じた理由を教えてください」（自由記述）とした。

2.5 分析方法

まず、グループごとに、片手による指揮に対して Positive な群⁹、Moderate な群¹⁰、Negative な群¹¹に分類した。

⁶ 2023 年 6 月 15 日および 22 日。1 回あたりの時間は約 90 分。

⁷ 2023 年 6 月 17 日、19 日および 21 日。1 回あたりの時間は約 60 分。

⁸ 「指揮者が片手で指揮を行う場合」のほうが「とても分かりやすかった」「どちらかと言えば分かりやすかった」「分かりやすさに違いはなかった」「どちらかと言えば分かりにくかった」「とても分かりにくかった」から 1 つを選択させた。

⁹ 「とても分かりやすかった」「どちらかと言えば分かりやすかった」を選択した群。以下、Positive。

¹⁰ 「分かりやすさに違いはなかった」を選択した群。以下、Moderate。

¹¹ 「どちらかと言えば分かりにくかった」「とても分かりにくかった」を選択した群。以下、Negative。

続いて、それぞれの群に属する対象者の自由記述の回答に対して、KH Coder 3 を用いた計量テキスト分析を実施した。品詞の選択については初期設定を使用した。前処理において、使用頻度が明らかに高いにも拘らず抽出されなかった単語¹²については「強制抽出」として指定した。一方、分割されて抽出された単語の一部¹³や、共起を確認する上で不要な動詞¹⁴や程度副詞¹⁵については、「使用しない語」として指定した。同義語¹⁶の設定についても、予め行った。出現回数の設定は「2以上」としたが、対象者が3人以下の群¹⁷については「1以上」とした。

3 結果

以下、実験後に実施したアンケートの分析結果を示す。尚、対象者数が当該グループ全体の10%未満となった群¹⁸については、抽出語一覧のみを示し、共起に関する分析は割愛する。

3.1 音楽隊における結果

音楽隊におけるアンケートでは、「指揮者が片手で指揮を行う場合、両手で行う場合と比較して、『分かりやすさ』はどうでしたか」との質問に対する回答は、「指揮者が片手で指揮を行う場合」のほうが「とても分かりやすかった」は0人、「どちらかと言えば分かりやすかった」が2人、「分かりやすさに違いはなかった」が14人、「どちらかと言えば分かりにくかった」が22人、「とても分かりにくかった」は0人であった。割合としては、Positiveが全体の5.3%、Moderateが36.8%、Negativeが57.9%となった。

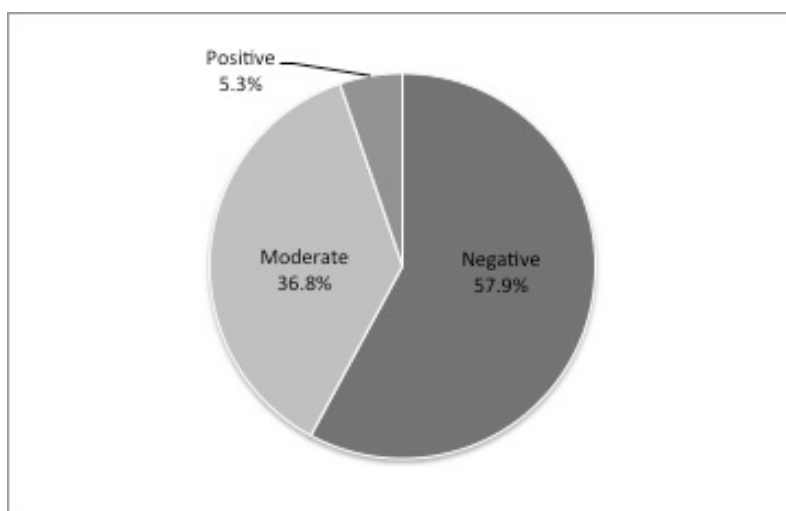


図1 「指揮者が片手で指揮を行う場合」の「分かりやすさ」に関して
奏者がどう感じたか（音楽隊）（N = 38）

¹² 「めくる」など。

¹³ 「気」など。

¹⁴ 「思う」など。

¹⁵ 「少し」など。

¹⁶ 「譜面」「スコア」は「楽譜」と、「身体全体」は「全身」と、「普段」は「いつも」と、それぞれ同義として扱った。

¹⁷ 音楽隊の Positive、吹奏楽部の Positive および Moderate。

¹⁸ 音楽隊の Positive および吹奏楽部の Positive。

3.1.1 Positive

音楽隊においては、この群に属する人数は38人中2人であった。自由記述より抽出された語は次の通り。

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
スッキリ	1	曲	1	短い	1
感じ	1	寂しい	1	片手	1

表1 抽出語一覧（音楽隊／Positive）

3.1.2 Moderate

この群に属する人数は38人中14人であった。自由記述の傾向は以下の通り。

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
片手	6	違和感	3	テンポ	2	慣れる	2
分かる	5	曲	3	演奏	2	止める	2
変わる	4	指揮	3	楽しい	2	伝わる	2
いつも	3	表情	3	勘違い	2	両手	2

表2 抽出語一覧（音楽隊／Moderate）

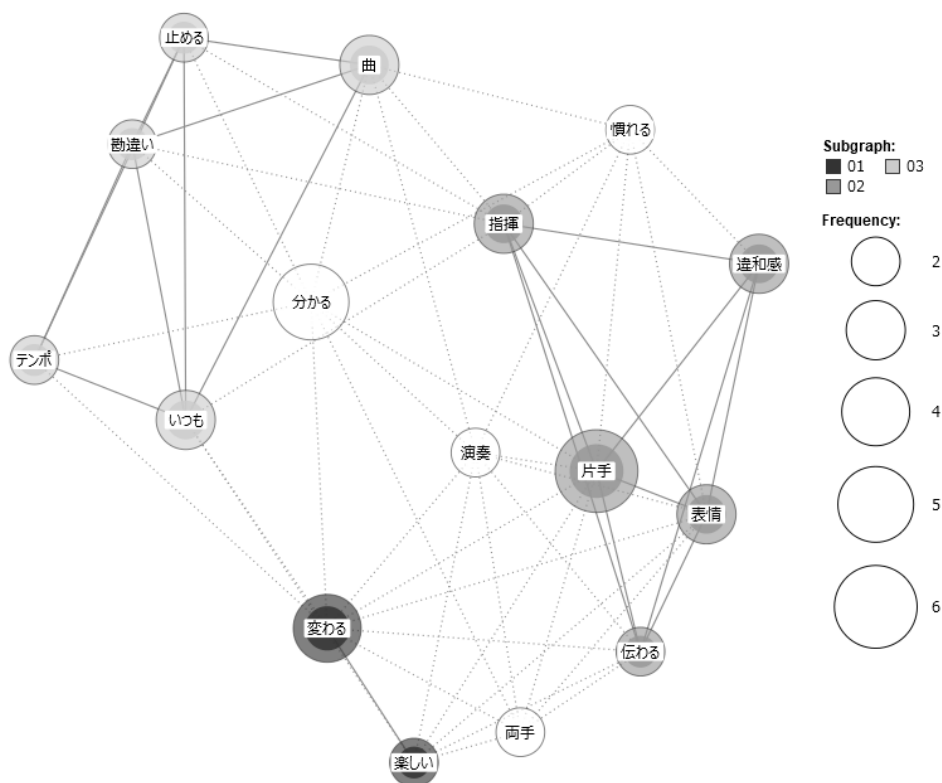


図2 共起ネットワーク（音楽隊／Moderate）

3.1.3 Negative

この群に属する人数は 38 人中 22 人であった。自由記述の傾向は以下の通り。

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
表現	10	吹く	4	読み取る	3	情報	2
いつも	9	動き	4	片手	3	全身	2
両手	9	テンポ	3	パート	2	大切	2
分かる	8	リズム	3	メロディー	2	入る	2
楽譜	7	慣れる	3	音	2	迷う	2
指揮	7	曲	3	見える	2		
めくる	5	見る	3	左手	2		
演奏	4	指示	3	止まる	2		

表 3 抽出語一覧 (音楽隊/Negative)

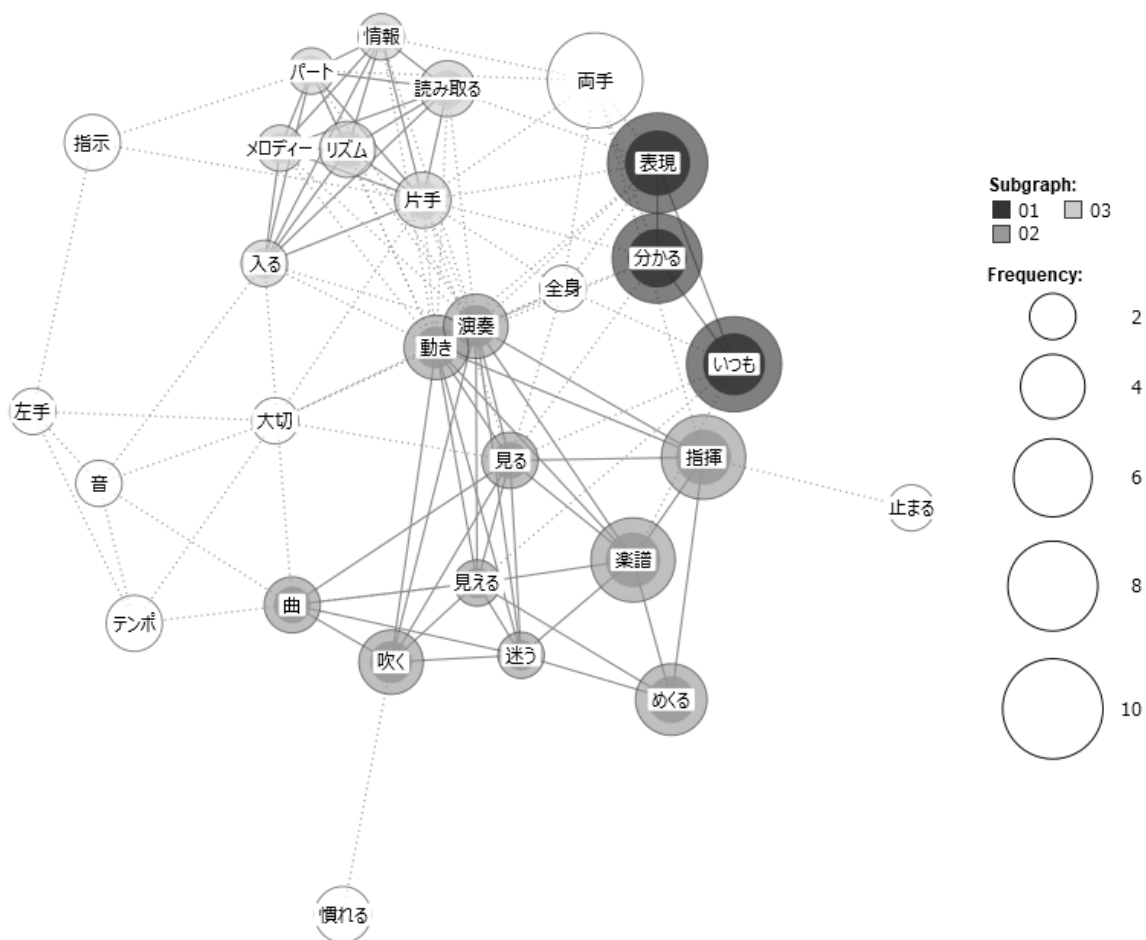


図 3 共起ネットワーク (音楽隊/Negative)

3.2 吹奏楽部における結果

吹奏楽部におけるアンケートでは、「指揮者が片手で指揮を行う場合、両手で行う場合と比較して、『分かりやすさ』はどうでしたか」との質問に対する回答は、「指揮者が片手で指揮を行う場合」のほうが「とても分かりやすかった」は0人、「どちらかと言えば分かりやすかった」が1人、「分かりやすさに違いはなかった」が3人、「どちらかと言えば分かりにくかった」が21人、「とても分かりにくかった」が1人であった。割合としては、Positiveが全体の3.8%、Moderateが11.5%、Negativeが84.6%となった。

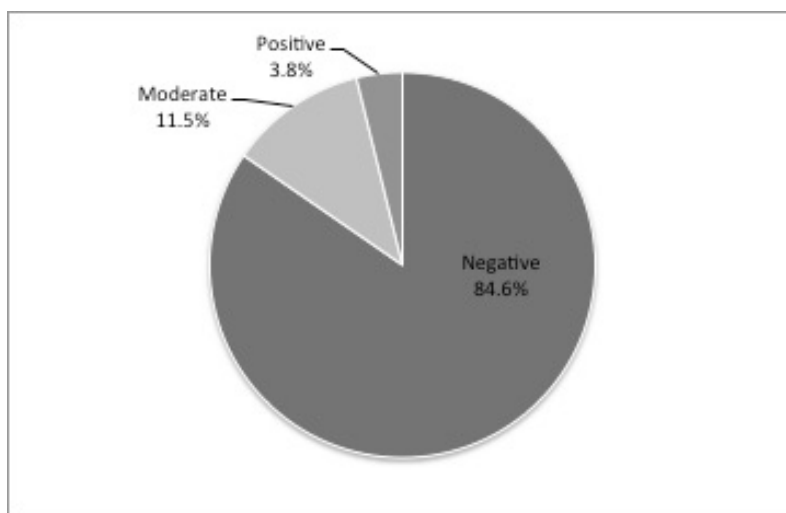


図4 「指揮者が片手で指揮を行う場合」の「分かりやすさ」に関して奏者がどう感じたか（吹奏楽部）（N = 26）

3.2.1 Positive

吹奏楽部においては、この群に属する人数は26人中1人であった。自由記述より抽出された語は次の通り。

抽出語	出現回数
意識	1
見る	1
限る	1
指揮	1
情報	1
片手	1

表4 抽出語一覧（吹奏楽部／Positive）

3.2.2 Moderate

この群に属する人数は 26 人中 3 人であった。自由記述の傾向は以下の通り。

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
テンポ	1	読み取る	1
右手	1	変わる	1
左手	1	片手	1
伝わる	1	両手	1
動く	1		

表 5 抽出語一覧（吹奏楽部/Moderate）

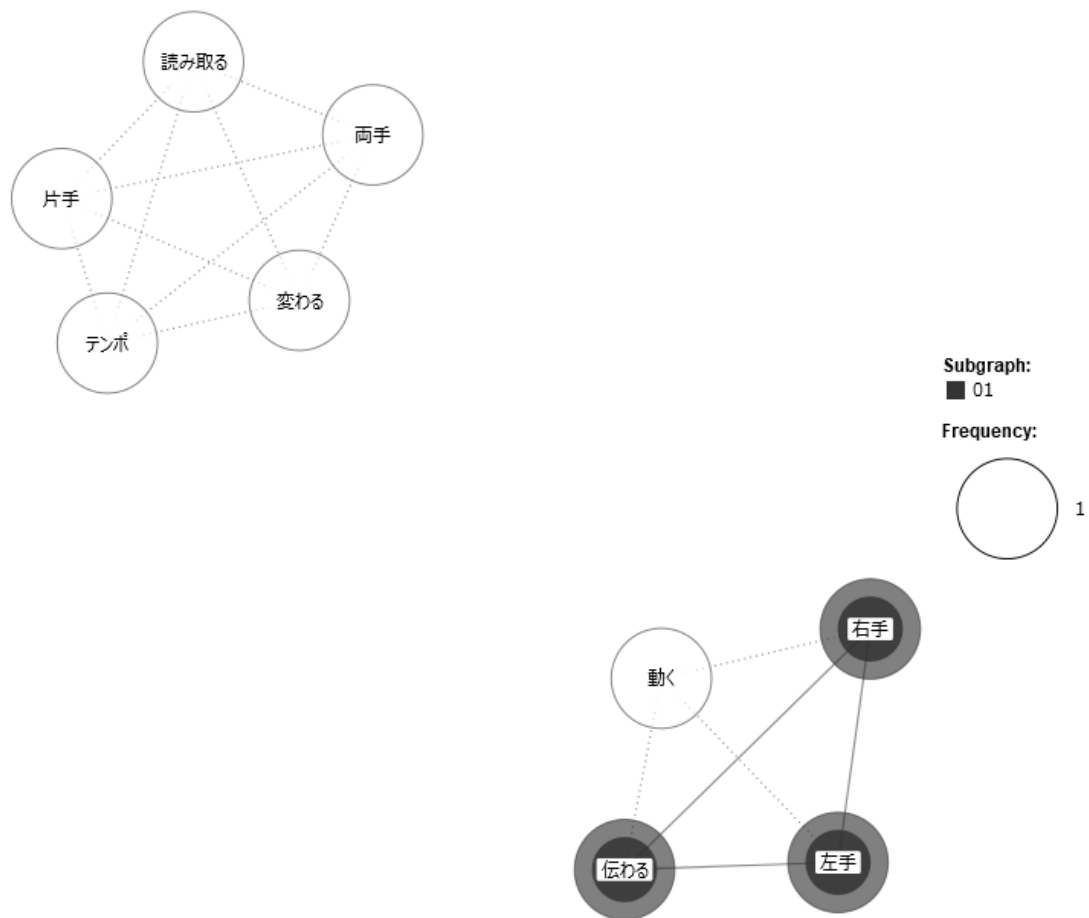


図 5 共起ネットワーク（吹奏楽部/Moderate）

3.2.3 Negative

この群に属する人数は 26 人中 22 人であった。自由記述の傾向は以下の通り。

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
片手	18	見る	4	動き	3	音	2
分かる	17	指示	4	入る	3	視界	2
指揮	16	先生	4	迫力	3	全身	2
両手	11	大きい	4	ずれる	2	難しい	2
楽譜	8	いつも	3	なくなる	2	半分	2
表現	7	タイミング	3	めくる	2	目立つ	2
テンポ	6	楽器	3	ニュアンス	2		
吹く	5	強弱	3	リズム	2		
めくる	4	自分	3	演奏	2		

表 6 抽出語一覧（吹奏楽部／Negative）

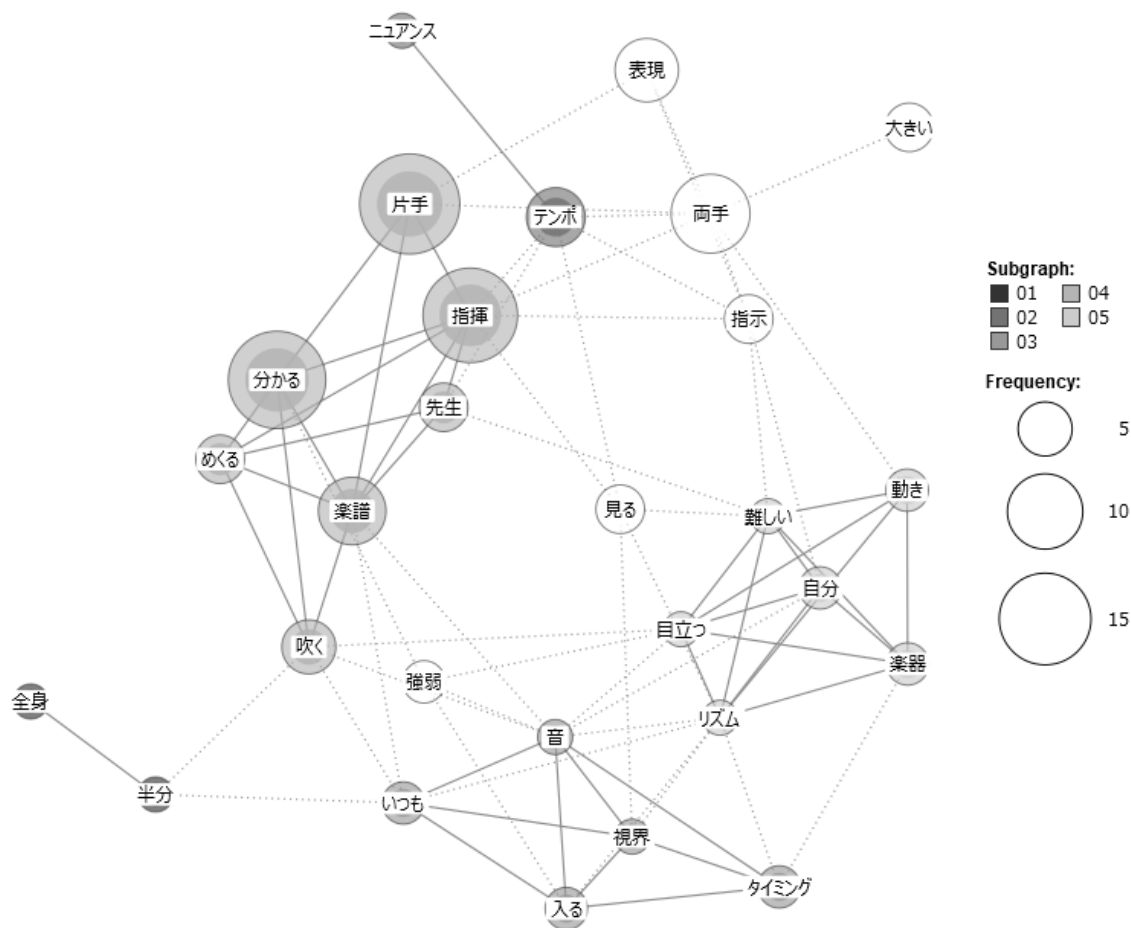


図 6 共起ネットワーク（吹奏楽部／Negative）

4 考察

実験後のアンケートでは、いずれのグループにおいても、指揮者が片手で指揮を行うことについて「どちらかと言えば分かりにくかった」との回答が最も多かったが、特に吹奏楽部においては「どちらかと言えば分かりにくかった」と「とても分かりにくかった」を合わせた Negative が 84.6%という非常に高い割合となっており、両手による指揮を必要としている傾向が強く現れた。

一方、音楽隊においては、Negative が 57.9%と半数を超えたものの、Moderate も 36.8%と比較的高い割合を示しており、隊員のおよそ 3 人に 1 人が「分かりやすさに違いはなかった」と感じたことが明らかとなった。

4.1 「分かりにくい」と感じた理由

Negative の自由記述の分析結果から、片手のみの指揮の「分かりにくさ」の要因について、いくつかの問題点が浮き彫りになった。

4.1.1 譜めくり

いずれのグループにおいても、以下のように、譜めくりの際の不都合が多く指摘された。

「楽譜をめくるときに、一瞬迷うときがあった。」（音楽隊・打楽器）

「楽譜をめくるときに、指揮を止めたのかと思ってしまう。」（音楽隊・打楽器）

「楽譜をめくっている間は（中略）リズムがみんなでバラバラになったり、音を収めるタイミングとかがずれたりした。」（吹奏楽部・クラリネット）

「途中で指揮が途切れると、テンポがずれる。」（吹奏楽部・ホルン）

4.1.2 表現および情報

いずれのグループにおいても、以下のように、表現や情報が伝わりにくいとの指摘があった。

「拍の取り方がオーバーになっている感じがしたので、細かい表現のニュアンスを読み取ることが難しかった。」（音楽隊・クラリネット）

「両手で行う指揮のほうが、得られる情報が多く、楽長のイメージしている音楽を感じることができる。」（音楽隊・トロンボーン）

「両手で指揮をしたほうが、表現や指示を読み取れた。」（吹奏楽部・テナーサクソフォン）

「迫力の部分の表現の仕方が分かりにくい。」（吹奏楽部・打楽器）

4.1.3 “慣れ”

音楽隊においては、片手による指揮に慣れていないことが要因として挙げられた。

「両手に慣れていたため、違和感があった。」（音楽隊・トランペット）

「両手を使ったダイナミックな指揮に慣れているため。」（音楽隊・打楽器）

4.1.4 直接的には自身の演奏と関わらない情報

吹奏楽部においては、直接的には自身の演奏と関わらない情報についての言及があった。

「両手のほうが、他の楽器の動きも分かって、休符明けのタイミングが分かりやすい。」
(吹奏楽部・アルトサクソフォン)

「どの辺りを指揮しているかが、しっかり見ないと分かりにくかった。」 (吹奏楽部・打楽器)

4.2 「分かりやすさに違いはなかった」と感じた理由

先述の通り、音楽隊においては、「分かりやすさに違いはなかった」との回答が一定数見られた。吹奏楽部生徒の回答も含めて、Moderate の理由には、次のようなものがあった。

4.2.1 テンポ

以下のように、テンポに関する指示の明確さが理由に挙げられた。

「テンポ等、十分分かりました。」 (音楽隊・クラリネット)

「いつもと変わりなく、テンポもつかめました。」 (音楽隊・バリトンサクソフォン)

「片手でも、両手のときと変わらず、テンポや拍を読み取ることができた。」 (吹奏楽部・打楽器)

4.2.2 表情

以下のように、指揮者の表情 (facial expression) も理由に挙げられた。

「表情でイメージできるため。」 (音楽隊・フルート)

「片手のときも、両手のときも、表情などが変わらないので楽しく演奏できました。」 (音楽隊・トランペット)

「片手に加えて、表情や全身の動きも使って指揮をしていただけなので、不便さは感じません。」 (音楽隊・トランペット)

4.2.3 “慣れ”

以下のように、“慣れ”についても言及があった。“慣れ”の種類としては、片手の指揮に対するものと、演奏する楽曲に対するものが認められた。

「違和感はあるが、慣れれば問題ないと思います。」 (音楽隊・トランペット)

「慣れている曲の場合、分かりやすさの面であまり違いは感じない。」 (音楽隊・ホルン)

4.3 「分かりやすい」と感じた理由

いずれのグループにおいても、極めて少数ではあるが、Positive の回答があった。「なんかスッキリした気がします」 (音楽隊・ホルン)、「片手だと情報が限られ、指揮を見ることに意識を持つようになった」 (吹奏楽部・ユーフォニウム) など、指揮が単純化されたことによる効果が理由に挙げられた。

4.4 片手のみの指揮による限界と可能性

譜めくりの問題については、タブレット端末に楽譜を表示させ、フットペダル (page turner) を使用することも解決策の一つとなり得る。ただ、器楽奏者を中心に普及が進む一方で、タブレット楽譜を好む指揮者は未だ稀である。要因としては、指揮者用スコアは情報量が多く一般

的な A4 サイズの端末での表示に不向きであることや、書き込みが容易でないことなどが考えられるが、これらの点の利便性が向上すれば、選択肢として十分検討できるだろう。また、本番の指揮を暗譜で行う場合には、譜めくりに関する不都合は問題にはならない。

片手のみでは伝わりづらいと指摘された表現および情報については、Moderate の回答理由にあるように、facial expression の活用によってある程度はカバーできる。しかしながら、両手による指揮の場合にも facial expression は用いているため、右手のみによる指揮を行う場合には、左手分の表現・情報が純減となってしまう。

音楽隊において Negative の要因として挙げられた“慣れ”の問題であるが、「両手に慣れていたため、[片手による指揮に]違和感があった」との記述は、中長期的には、Moderate の回答理由にあった「[片手による指揮に]違和感はあるが、慣れれば問題ない」と同義であると捉えることもできる。

以上のことから、Moderate の理由として多く挙げられたテンポの正確性を保ちつつ、facial expression を最大限活用し、リハーサルを重ねて慣らしていけば、少なくとも消防団音楽隊のように経験豊富な奏者の多い楽団においては、片手による指揮でも一定程度対応可能であると考えられる。

一方で、今回の実験では、中学校吹奏楽部のように経験が浅いバンドの奏者は、非常に多くの情報を指揮から読み取ろうとしており、しかも、その種類は多岐に亘ることが明らかとなった。これらのことは、特に教育現場において、両手による指揮が可能な状況であっても、左手を適切かつ有効に使用できているかどうか、あらためて検証することの必要性を示唆している。

5 おわりに

片手による指揮が「分かりにくい」と回答する奏者が多いであろうことは当初より予想できたが、吹奏楽部の生徒 26 人中 22 人が Negative であったことは予想を上回っていた。生徒たちが指揮による情報を強く求めている事実は、「学校現場における指揮者に求められるのは、ほとんどリハーサルの技術である」と述べている西尾¹⁹とほぼ正反対であり、大変興味深い。

今回は吹奏楽団を対象とした実験を行ったが、例えば合唱の場合、通常時でも拍を明確に示さない指揮者が多いことなどから、全く異なる結果が出るかもしれない。また、難解かつ大規模な管弦楽作品を用いた場合も、結果は違ってくるだろう。

‘One-handed conductor’ の絶対数は少なく、いわばマイノリティである。誰もが分け隔てられることなく音楽を楽しめる社会の実現に向けて、様々な観点から研究を続けていくことが今後の課題である。

¹⁹ 西尾洋「教員養成課程における指揮法講義」『岐阜大学教育学部研究報告 教育実践研究・教師教育研究』21 (2023): 35.

引用・参考文献

- Ura, Yuichi. "A Perspective on Conducting Courses in Music Education Programs in Japan." D.M.A. Essay, University of Iowa, 2013.
- 浦雄一「教員養成課程の合奏授業におけるアクティブ・ラーニング：学生による基礎練習教材作成の試み」『宮崎大学教育学部紀要』88（2017）：1-11.
- 小原光一 他 監修『中学生の音楽 2・3 下』東京：教育芸術社，2023.
- 斎藤秀雄『指揮法教程』東京：音楽之友社，1956.
- _____.『指揮法教程：改訂新版』東京：音楽之友社，2010.
- 高階正光『完本 指揮法入門』東京：音楽之友社，2001.
- 西尾洋「教員養成課程における指揮法講義」『岐阜大学教育学部研究報告 教育実践研究・教師教育研究』21（2023）：29-35.
- 樋口耕一『社会調査のための計量テキスト分析：内容分析の継承と発展を目指して 第2版』東京：ナカニシヤ出版，2020.